

平成 23 年度組織的な大学院教育改革推進プログラム
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

I 自主企画の内容

(1) 企画の名称

「中国における選手の養成環境と引退後の生活設計」

(2) 開催日期・会場

2011 年 10 月 26 日（水） 講義：10:40～12:10 コラボレーションセンター 講義室 Z306

エキジビション：12:10～13:00 第一体育館

(3) 講演者

厳小維（中国広東省体育運動職業学院 卓球・バドミントンセンター所長）

白井功（国際基督教大学非常勤講師

独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊技術顧問バドミントン担当）

余暁（中国広東省体育運動職業学院 バドミントン学部講師）

潘騰（中国広東省体育運動職業学院 バドミントン学部講師）

聶小華（中国広東省体育運動職業学院 卒業生）

(4) 企画者

胡山喬 人間文化研究科 人間行動学科 専攻 博士前期課程 1 年

大島悠 人間文化研究科 人間行動学科 専攻 博士前期課程 2 年

(5) 支援教員

甲斐健人（文学部人間行動学科准教授）

(6) 参加人数

80 名（内訳：[学内]教職員 20 名、大学院生 7 名、学部学生・研究生 35 名、[学外]18 名）

(7) 自主企画概要

①講演会は 4 名の講師を中心に展開された。厳氏は中国に 50 年前に作られ、長く近年まで続いていた選養成制度と北京五輪以後の現行制度との違いを紹介した。旧制度で養成された聶氏は選手引退直後、生活設計に非常に苦労した様子を紹介した。潘氏と余氏は養成過程における注意点について語った。これらの報告を受け、白井氏は中国の選手養成環境はエリート教育（選抜教育）であると指摘した。

②エキシビションでは、中国広東省体育運動職業学院バドミントン学科に所属する学生たちが学外者を含む企画参加者と実技を行った後、学生による模範試合を行った。

II 実施報告

本企画は「中国における選手の養成環境と引退後の生活設計」というテーマで開催された。今年、スポーツ基本法が公布されるなど、日本では国家的にスポーツ選手を養成しようとする動きがみられる。国家的な選手養成制度を活用し、世界でも有数の「スポーツ大国」となった中国における選手養成制度を理解するとともに、そこで育った人材が引退後どのように生活していくのかに関する知見を得ようとした。

厳小維氏は中国競技スポーツ選手養成制度の変化を、旧制度と現行制度を例に説明した。北京オリンピック開催度、中国では約 50 年続いた旧制度は変更され、選手に競技成績と学歴を身に付けさせようとしている。選手として一流であっても引退後の生活が困難になるケースもあった旧制度の反省に立ち、引退後にスポーツの世界で活躍するためにも、多様な能力を身につけさせる必要があるという狙いがあった。厳氏は時代のニーズに合わせてつ次世代に文化をつなげることの重要性を指摘した。

バドミントンコーチの余暁氏と潘騰氏は、選手指導における留意点について報告した。技術指導では細かい差異がある個人の成長に合わせた課題の提示をすることが重要だが、最も配慮するのは意識の教育だという。現在ではゴールドンエイジと呼ばれる 10 歳ごろまでの指導が重視されており、幼少期の人材養成が重要と考えていることが指摘された。

旧制度で養成された聶小華氏は 1980 年代に引退し、大手貿易会社に勤務した後、英語能力の向上のため自費でオーストラリアに留学した経験を語った。当時の制度では引退後、自分の経験をいかに生かして生活できるかは引退後の個人の努力にゆだねられる部分が多く、聶小華氏の戸惑いが伝えられた。

これらの報告をふまえて、白井氏がアジア諸国の選手養成制度と比較しつつ中国の選手養成環境は一種のエリート教育（選抜教育）と指摘した。

最後に、参加者を含め質疑応答が行われた。

この講演をとおして、中国の社会事情を理解することなく、そのスポーツ政策を理解することは困難であることが確認された。特に、選手たちが学校現場でスポーツ指導ができるように学歴を身につけようとしている姿が印象的であった。

エキシビションはこの年代の世界レベルの選手たちとともに汗を流し、模範演技を見るなど、貴重な会となった。奈良バドミントン協会からの参加者など学外からの参加にも恵まれ多様な交流の場ともなった。振り返ると講演とエキシビションを短時間で行うという欲張りな企画だったかもしれない。全体的に時間が超過したものの、もっと時間があつたらより充実した企画となったと反省している。